

子どももフルに伸びるまちづくり

①子どももフルに伸びるまちづくり
②若葉・白団地の子ども会活動

①子どももフルに伸びるまちづくり

上大岡日曜子ども会からの報告

篠崎正明

一 上大岡のまちづくりと子どもたち

「おもしろい！こりやおもしろい！」と言
いながら水しぶきをあげて川の中を走り回る子
どもたち。高さ五〜六メートル、幅一〜三メ
ートルの川を横切って張られた三本綱渡りを緊
張した面持ちで子どもたちが渡っていく。水面
に仕掛けたつりばしごを四つんばいになってバ
ランスを取りながら進んでいく子ども。手づく
りの舟やイカダに乗って船頭気どりの子どもた

ち。ついには川の中で泳ぎはじめてしまう子ど
もたちもでてくる。一〇〇人近くの子どもたち
が川に入り、男の子も女の子もズブ濡れになっ
て夢中に遊ぶ様子はある面では壮観でさえあ
る。

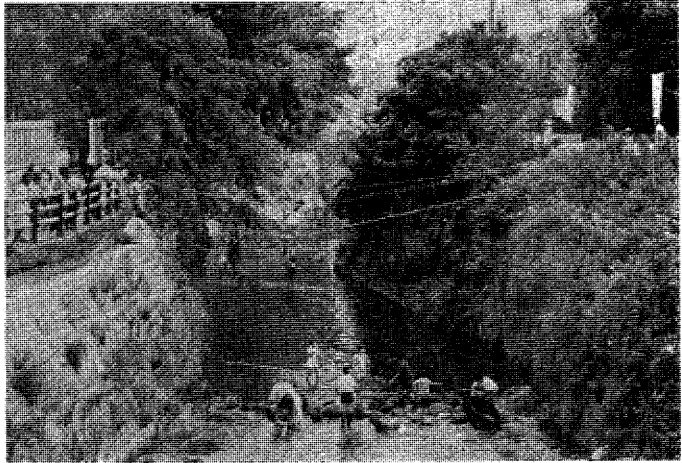
「ネエ！来週もこれやってる？」「今度や
るときは必ず呼んでネ」「ボクも子ども会に入
りたい」と支援している我々に言ってくる子ど
もも出てくる。第五回大岡川クリーンフェステ
イバルの川遊びのことである（写真一・二

一 上大岡のまちづくりと子どもたち
二 日曜子ども会のこれまで
三 子どもの発達環境と支援システム

・三・四）。

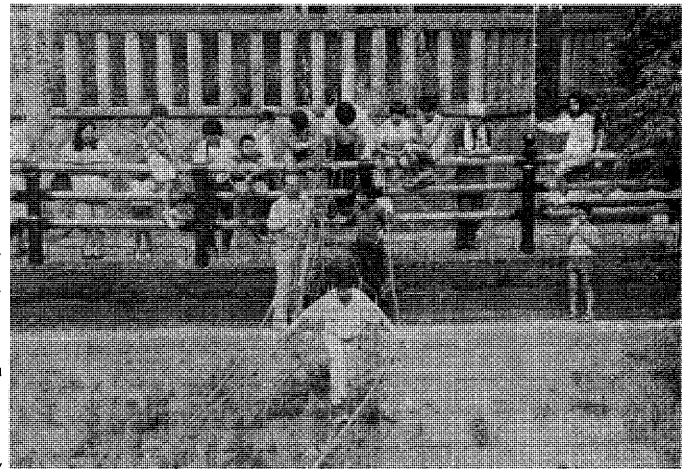
日常生活のなかに身近な自然をとりもどそう
という願いをこめてクリーンフェスティバルは
今年六月十三日、十四日と二日間に行わ
れた。汚れた大岡川を昔のように魚とりや川
遊びもできる憩いの生活空間として再生してい
こうと、川掃除などの活動をはじめから五年
目になる。しかし、年に一〜二度の川掃除やイ
ベントをやっているだけでは、なかなか川はき
れいになっていけないし、自然あそび空間のよ

写真一 大岡川の綱渡りをする子どもたち



うに再生してもいかない。そうしたことから昨年四月には上大岡近辺の住民が中心となって「大岡川の再生をすすめる会」をつくった。その大人たちの毎月の川掃除につられて、川遊びに入ってきていた日曜子ども会のメンバーが中心となり、今年一月には「川をきれいにする子ども会」もできてくる。今回のフェスティバルは川沿いの上流域にまで大岡川再生のネットワークを広げていこうと、子どもと大人が一緒になって企画、準備をすすめた。

写真二 同上



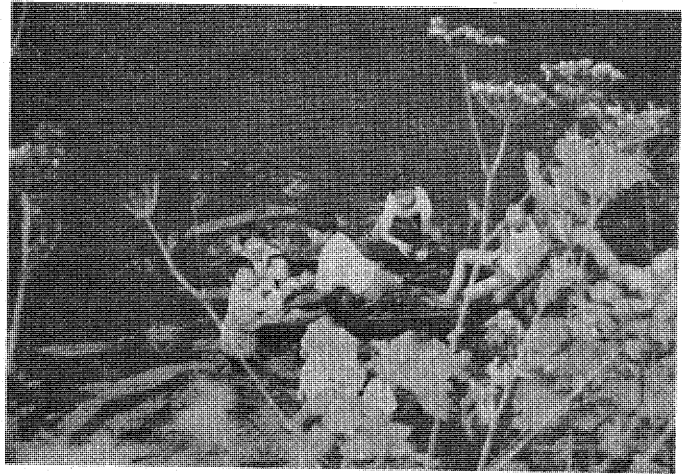
主催団体も大人の「再生の会」と「川をきれいにする子ども会」とが対等に名前を並べる。ここでは子どもをただ単に子ども扱いにはしない。同じ社会を形づくる一員として、できるところはなるだけ一人前扱いするようにも努めてきている。川・自然あそび公園化プランづくりなどでは特にそうであるが、川空間を使って遊ぶ子どもたちの発案、要求などは他の年代層と対等に取りあげていくようにもしている。子どもたちは、川遊びアドベンチャーコー

写真三 大岡川で水あび



ス、川沿いの花一杯作戦、大岡川汚れ調査、川再生基金バザーと実に盛りだくさんの企画をする。クリーンフェスティバルの一カ月前から大岡川の中を源流の氷取沢まで歩いて、水質検査や川の汚れの証拠写真を撮って、半日がかりの上流調査を繰り返してきた。その調査結果を「探検大岡川」としてまとめ記者会見を行うとともに、フェスティバル初日の川つぶち会議で報告もした。川遊びはもとより、大岡川はてなゲーム、じっくり聞こうコーナーなど川つぶち

写真一 大岡川でボート乗り



会議の参加者も大半は子どもたちだ。川掃除を除けば、正に子どもたち主体に川再生活動がすすめられ広がってきている(写真一五)。

川沿いを四季折々の花で埋めつくそうという花一杯作戦も、女の子が中心となって二月からの花の苗づくりを皮切りに、毎月のように草取り花植え作業を行ってきた。イベントの当日には、近くのマンションの家族が何組も参加して花植えを行ってくれるなどの広がりにもなってきた(写真一六)。

写真二 探検大岡川の発表風景



このフェスティバルを契機に川再生をベースとした地域のネットワークの広がりに第一歩を大きく踏み出した。そして、我々が夢に描く近未来の大岡川自然あそび公園をちよっぴり擬似体験させえた一日でもある。

「三本綱渡り、ロープウェイ、ハシゴ渡り、大・中の舟やイカダなど。どのゲームもいまこれだけの遊びを無条件でさせられる親がどのくらいいるかと感じさせるような、衣服の汚れやちよっぴりとしたげがをしかねないような

ゲームの中で、日曜子ども会のメンバーは腰まで水につかりながら何度もイカダを往復させる」

とは川あそび取材した「はまかせ」の記事である。

外からみれば確かに「危険」のある遊びをスイスイやっけてのける子どもたちや、それを平気でやらせている親にはビックリするかもしれない。しかし、これもここ二、三年の積み上げた努力と変化があつてのことである。

川遊びでのロープ掛けなど、日曜子ども会のメンバーは今ではもうごくあたりまえのこととしてサッカーとやっけてのけるようになってきている。三本綱渡りなどは全身のバランス感覚などかなり総合的な運動諸機能の発達がないとなかなかムツカシイ。しかし、子ども会のメンバーがいれば模範のようにやっけていく。それで、最初は人だかりのようになって見ていたはじめての子どもたちも「ボクもやりたい。やる！」というようになっていく。見よう見まねで真似してやっけていくうちに皆どんどんコツをのみ込んで平気のできるようになる。五、六歳の小さな女の子でも平気で渡っていくようにもなるのは驚きだ。はじめはやっけてみたさ半分。おっかなさ半分。こわごわチャレンジしてみても緊張とスリルと興奮。「やっったア!!」「すげ

写真一6 川沿いに花植え



「や。おもしろい！」「来週もまたやってよ！」

日曜子ども会の遊びの質にもこの間、新しい展開がみられるようになってきた。自分たちだけで楽しく遊ぶレベルから、より社会性をもった遊びへの展開である。自分たちで企画計画したものでより広範囲の人々に遊んでもらい「スゲー！」「オモシロイ」と感動させ喜んでもらうことが今度はより大きな喜びにもなっている。自分たちだけで遊ぶことよりもより一層おもしろいし、意欲もわいてくる。

「大岡川の汚れ調査」についてもそうだ。自分たちもより安心して川遊びができるように川をきれいにしようということで子どもたちも川掃除をはじめた。しかし、いくら川掃除をして

も上流からゴミが流れ込んでくる。

「こんなこといくらしてもダメだよ。上流にも川をきれいにする子ども会をいっぱいつくって上流の人にも川をきれいにしてもらわないと」とイカツイ(腹を立てた)E君の発言が発端だ。それだったら上流まで川を調査して川を汚す犯人を捜そう。証拠写真を撮って多くの人たちに訴えて川を汚さないようにさせよう。

より説得力があるように科学的に水質検査もやってみよう。宣伝カーに乗ってマイクで訴えかけよう。こうしたことから記者会見をするようになってきた。子どもたちの社会的発言体験として画期的だったかもしれない。

遊びでありながら、社会的な意味と価値があるからこそより一層やりがいがある。遊びの面白さも新しい質への展開である。

「まちの人々も最初から理解があったわけではない。川遊びを始めた当初は批判、非難もなくなかった。「子どもにあんなことをやらせるなんてとんでもない。あんな汚ない川でけがでもしたらどうするんだ！」と近所のおじさんがどなり込んできたこともある。しかし、当のおじさんもかつて子ども時代は、大岡川で大いに泳ぎ魚とりや川遊びをやって育ってきている。

「あの頃は川もきれいでとつてもよかった。」
「それだったら危いからといって遊ばせないようにするのはなくて、むしろ子どもたちが安心して遊べるように川をきれいにしていくのが本当では？」「それは確かにそうだ。」そんなやりとりも通して周囲の見方もずい分変わってきた。

子どもの親たちも今では、子どもがドロコになって遊ぶのは当然のことと、いくら汚れてもいいように必ず着替えの服を持たせてくれるようにもなってきている。川遊びに近隣の家族が親子づれで参加してきてくれるようになってきたのも嬉しい。

しかし、こうした川掃除、川遊びの輪が不特定多数の人々も含めて広がっていると、あつてはならないことであるが、万々が一の保険システムもやはり考えていかないといけない。我が子ども会もメンバーとイベント時の参加者には活動保険をかけている。しかし、ゆくゆくは地域共同での川活動保険的なものもつくっていかざるをえない。そうしたことも含め川遊び公園化プランの検討もすすめてきている。

二——日曜子ども会のこれまで

日曜子ども会が恒常的な活動を始めて今年で

三年目になる。これまでの子ども会の支援者側のかかり方、支援の仕方からめての子ども集団の発達は、大きく三展開してきている。

横浜市大が上大岡のまちづくりに参加し始めた一九八三年からこの地域の子どもたちとのかわりが始まる。それから八四年十一月に日曜子ども会が発足するまでのイベント主軸の時期があり、第一期が子ども会発足から八六年夏頃までの支援者側が先行的な支援・リードを行った時期。

第二期が今年夏までの、子どもが自主的に企画をたて計画を推進していく時期。

そうして、今その飛躍への過渡期でもあるが、子どもたちが準自治的組織として推進していく第三期へ入っていくとしていっている。さらに自分たちで自治的な力をもつけていき、次の時代を開くにたるスケールをもって伸びていくようになる過渡期ともいえる。

① 日曜子ども会のできるまで

上大岡での子どもの発達の活動づくりは、上大岡クリーン地区のまちづくりに横浜市大のまちづくり研究チームが加わった五年前から始まる。まちづくりもイベント段階で、大岡川クリーンフェスティバルや夏祭りリフレッシュ上大岡を中心にまちづくりの気運を盛りあげていっ

た時期である。市大ではまちづくりの重要な核として、子どもたちの多彩な活動展開を通じての総合発達のシステムづくりにチャレンジする。

夏祭りで「子どもミュージカル」をやるうと演劇をやっていた学生が支援の中心となり、地域の子どもたちに声をかけ練習を開始する。演劇遊びの役づくりを通して子どもへの願いや思いを実現させ、自らの「粹」を越えて子どもに伸びていってもらう。そういう支援方針をもって望みもしたが、子どもの発達支援など初めてのことでもあり、なかなか思ったようにもすすめていけない。

試行錯誤を繰り返しながらも、ともあれ子どもミュージカルは大成功。仮設テントには子どもからお年寄りまであふれんばかりの大盛況。子どもたちも支援者も大きな感動と達成感を体験することができた。

この成功体験がもとになり、翌年には子どもミュージカル第二弾を実現するとともに、ミュージカルを手伝ってくれた中学生たちがビデオ作品づくりや中学生放送局をやるようにまでなってくる。

小・中学生まで含めた発達活動をすすめていく上で、大きなネックとなっていたのが「場所」の問題であった。劇の練習や作品づくりを

するにも子どもたちが集まる場所を捜すのに苦労する。

これも、時間がかかったが解決していく。まちづくりに大きく踏み出そうとしていたグリーン地区の商店会の方の好意で、倉庫として使っていた一軒家をあけてもらい、商店会事務所兼まちづくりセンター兼子どもセンターがオープンすることとなる。

② 第一期

第一期の成果は、ムチクチャと喋っている子どもたちの活力・パワーが育ってきたこと。さらに、支援者側の力量不足から本格的に展開させるまで十分いかなかったとはいえず、八五年リフレッシュ上大岡のお化け屋敷づくりを通じて願望実現型に近づけたことである。

この時期は大きく二つに分かれる。八五年にお化け屋敷づくりにチャレンジし始めるまでの集団以前の状況と、お化け屋敷づくりを契機に願望実現に向けて自分たちで意欲的に取り組むようになってゆく時期と。

この時期は子ども自身はまだ自分たち自身で企画計画がなかなかたてられないこともあり、支援者の側が、その心的環境づくりまで含めて、願望実現に向けて積極的にサポートをする支援者の先行リードの時期といえる。

今までと違い、日曜ごととはいえず子どもたちが自由に使えることのできる空間ができた意味は大きかった。子ども会は午後一時から始まるのに、朝の一〇時頃から楽しみにしてセンターの前で待っている。

子ども会ができる前は、日曜というのに子どもが電柱にボールと寄りかかっている姿をみるのがよくあった。子ども会ができてからはもう毎週日曜日を楽しみにして、眼を輝やかせて遊んでいる。もつと前からあったらうちの子もめんどうをみてもらえたのに、とは近所のおばさんの言葉。

最初は子どもの希望があつたのだが、上級生を中心にSF作品づくり。低学年も一緒に作品づくりもし、あきたら外の歩行者天国の道路で、ドッチボール、野球、サッカー、鬼ごっこ。上級生は本物のTVアニメに負けない作品を作ろうと、宇宙戦争の模型づくりをしながら内的なイメージをふくらませていく。ストーリーづくりをしながら想像力、創造力が伸びていくようにとすすめていった。

しかし、それもなかなか継続的に完成に向かうようにはすすめていけなかった。支援者側の力量不足が一番の問題とはいえず、空間的狭さや子どもたちの集団以前の状況もある。

専有空間ができたとはいえず六畳と三畳半と台

所がある程度で、子どもが十数人も入れれば足の踏み場もない。そんな中で低学年の子どもから中学年の子どもまでベタバタ支援の兄ちゃんからみついてくる。

もしかしたらこの子にはスキンシップの不足やら愛情の欠乏があるのかもしれないと思うとそう邪険にもできない。やさしい兄ちゃんなどはいつも二三人の子どもに乗りかかられてオモチャにされる。あげくのはてに、作業している横でドツキあいやプロレスごっこまで始まり、つくりかけの作品もブチ壊される。集中して作業するどころではない。

ねんど工作や絵をかかせてもグチャグチャと汚なく塗りたくり、「ウンチ」「オチンチン」「オニ!」「バカ」などの言葉を言ってみては喜ぶ。しかし、こういうことも二〜三カ月から半年もたつと自然とやらなくなってくる。

年始の計画会で思いの他強く子どもたちから希望がでたのが「遠出」である。それで八五年の企画では、舞岡での自然遊びや農作業をはじめとする遠出会をするようになる。

ニーズが強いだけあって子どもたちは喜んで行く。舞岡の自然のなかであれば、どれだけあばれようが大声を出そうが怒られる心配もない。山や木立や田んぼの中で、虫やオタマジャクシをとったり、ドロコになって夢中で遊ぶ。

最初の頃はドッチボールを二〇分もすると、息切れして道路にゴロッと横になっていたJ君。体は大きいけれど緩慢なところもあったため、以前は体の小さい子にドツかれて自分のようでもあった。しかし、自然の中での集団遊び、夢中遊びをするなかで見違える程ワイルドになってきた。今ではドツかれたらなぐり返すようにもなつてきている。

こういった活力やパワーの伸びは、他の子どもも集団と一緒になつたときすぐ目立つ程度である。子ども科学館やプレイパークに行つたときも「上大岡の子どもたちのパワーには負ける。」といわれる位である。

八五年夏のリフレッシュ上大岡ではお化け屋敷をつくりたいということになり、お化けづくりにから大工仕事まで作業をすすめる。小屋づくりでは、取り壊した家のところまで廃材をもらいに行き、使える材木選びや廃材運びまで熱心に取り組んだ。いつもはなかなか集中しないO君もこのとき初めて大工仕事を中心に集中して取り組む。

支援者側もかなりエネルギーを投入した。何よりも子どもたちに成功体験・達成体験をさせることが重要だと考えたからだ。日常生活では禁止形・否定形のオンパレード。ちよつとした願望でも「ダメヨ」「デキナイヨ」という否定

的な対応でつぶされているとすれば、せつかくやろうとしている願望は何としてもやらせきたい。『やればできる』という体験は子どもたちにとって大きなプラスになるに違いない。

子どもたちは直前まで「ホントにできるの?」「間に合うの?」と半信半疑でもあったが、大成功。朝日新聞が取材にもきてくれ、当日は行列ができる程にもなった。

子ども会のOBが以前言ったことがある。「ここの子ども会はスゲーよな。まさかと思っていることを本当にやりとげちゃうんだもの。」やり遂げることが自己信頼にもなり次々と新しいことやチャレンジしていく基盤にもなる。

リフレッシュの成功をうけて子ども会のメニューも遠出、大工、絵画、音楽の四領域として組むようになる。リフレッシュでは女の子たちがリコーダー演奏もやり、お化け屋敷づくりでは絵画や大工・工作もやるようになってきた。

子どもの興味関心も多様であり、総合発達に向けての一步も多彩であるならチャンネルは多くあった方がいい。たとえば音楽遊びに興味のある子どもは、それを通して他の領域も伸びていくようにと考えてのことである。

この頃から支援者も学生中心の態勢から、以前から手伝いに来ていた社会人(サラリーマン)中心の支援へと切り換えるようになる。学生の

場合、卒業後の人生選択に向けて学生時代にさまざまな模索をすることが大切である。まちづくり以外の勉強まで含めた多様性、自由性が必要である。しかも、まちづくりが一〇年、二〇年にわたる息の長い仕事であるなら、中心となるのはやはりそこで生活し暮らす人が適切である。

サラリーマンの我々としてみれば、当初は自分自身のリフレッシュや息抜きがてらに手伝っていたのでもあるが、子どもたちとのやりとりや、準備過程そのものが仕事にも大きくプラスしてくる。子ども会で学んだことも仕事にも役立てていけるし、仕事を通じて学んだことも子ども会に生かしてもいける。支援するサラリーマンの数が増えてきたこともあり、支援態勢も大きく組み替えていった。

③—第二期

第二期から子どもたちが自主的、共同的に企画をたて推進していくようになる。

八六年夏のキャンプが終わってからの後半期の計画会のことである。「キャンプはどうだった?」「オモシロかったけどツマらなかった」「どうして?」「だって思いっきり遊ばなかったじゃん。ごはんつくったりあと片付けしたりで忙がしくて」「そりやそうだろう。でも今か

らでもやればいいじゃない。秋は舞岡にしよう行くんだし。それにしても、何が一番やりたいん?」そういうやりとりを通して、舞岡の自然のフィールドを使って忍者遊びをすることになる。ただ忍者ごっこでもつまらないので仕掛けをたくさんつくって忍者の修業コースをつくらう。発案者のO君の提案で早速近所のアスレチックコースに行き、ロープ仕掛けのアイデア・企画づくりをスタートさせる。後期は舞岡での農作業とためじコースづくりを中心としてすすめていった。

林の木にロープをつるしてのターザン。大ブランチ、二本綱渡り、三本綱渡り、ロープウエー、忍者小屋等々。毎回毎回新しい仕掛けが一つ二つと完成していく。自然の中で大きく空を切って揺れるターザン。スリルと興奮と何ともいえぬ爽快感。皆夢中になって真黒になって遊ぶ。「オモシろー! アイツバカだよ。こんなおもしろいのに今日来ないなんて」「こんなところだったら(舞岡に)ずっと住んでもいいなア」

こういう集団的な夢中遊びを通してこそ子どもは総合的に伸びていく。集団的全身運動を通して活力、エネルギーは育っていくし、バランス感覚、敏しよ性、筋力、持久力、持続力等の体力も身につける。興奮や感動を通して精神

的力も伸びていくし、集団での企画、調整力、集団神経などの社会的機能も大いに伸びる。

こういったことができるのも自然という舞台装置があつたことである。林や水や丘などの、いくらでも自分たちが自由に利用し組み立てていけるフィールドとしての自然のもつ意味は大きい。子どもの発達にとって、舞岡のような自然は、より壮大な大自然や身近な自然と同じくなくてはならない存在でもある。

ためし遊びをしながらさらにアイデアもわいてくる。舞岡の十一月の収穫祭では、忍者コースをこういうゲームにしよう。イメージがふくらんでもくるから「今日はここまでやったから次回はこうやろう」と自分でプログラムをもつてくるようになる。目標逆算型の思考もできるようになってくる。一期ではこんなことはあまりなかった。子ども会に来ると「今日は何するの?」と支援者に聞いてくる状態だった。

企画の議論も子ども同士で調整しながらできるように becoming。大人は技術支援と安全性のチェックを中心に行う。自分たちで役割分担をし、各人が黙々と作業をすすめる。ある子どもは忍者のコスチュームづくり。針仕事など初めての子が、大きな体をまげて座わりこみ、針に糸を通したりブキツチョな指使いで縫い物をしてる姿はケツサクでもある。カッコ

イイ忍者の服を着て林をかける自分の姿を思い描いてもいるから長時間集中して作業もできる。ある子どもはカッ車を使つてのロープウエーづくり。どうしたら着地のときにスピードを弱め安全になるか実験を繰り返す。それぞれの子どもたちが、勝手気ままなことをやっているように、共通のできあがりイメージに基づいて作業をしている。

当日は近所の小学校の生徒まで含め一〇〇人以上の子どもたちが忍者コースで遊び大成功。終わつてから、その小学校の子どもたちが上大岡の子どもたちに感謝をこめて歌をプレゼントしてもらった。

帰りがけに「来年もまた忍者コースやろうね!」と低学年の子が言う。「イヤもう同じことはやらない。来年はもっと違うことをやるんだ。」と上級生。もう子どもたちの頭の中には来年の企画が生まれてきている。

今年前半は川遊びを中心とした企画ですすんでおり、冒頭で紹介したクリーンフェスティバルはその成果でもある。

④—第三期

こうした自主・共同企画・推進の成功をふまえて、今年からは木曜ペンキョー会をスタートさせている。子どもの興味・関心は地球の誕生

や宇宙などのスケールの大きいものにも広がっている。そういった興味・関心のところから、科学的な思考力や計算力・表現力まで含めた次代を開くにたる総合発達のプログラムにチャレンジしている。

日曜子ども会の多彩な活動を主体とした発達支援と、木曜ペンキョー会の知的世界の発達支援をリンクして総合的に伸びていけるようにもしたい。

今、子ども会は新しい展開へ飛躍しようとしている。最大限自力で企画・推進し準自治組織的な子ども会への飛躍である。支援者は次の時代を開いていけるスケールのかい子どもたちへ伸びていけるように準備もするし、安全性のチェックや資金面での支援もするが、自分たちでできるだけ困難を突破できるようにもしていきたい。

これから二〇年、三〇年先にたつて考えたときにそういう自治的力や自分たちで困難を突破していくことが非常に重要とも考えているからだ。

三——子どもの発達環境と支援システム

あと二〇年〜三〇年後には今の子どもたちが社会の担い手の中心になっている。もしかした

らその頃には、今以上に地球的規模での問題群が深刻化しているかもしれない。環境汚染や自然破壊による地球生態系の危機、人口問題や食料問題、高齢化の進展など。一方では、生産中心の時代から発達主軸の時代へと、科学技術の発展や国際化の進展を背景に今まで考えられなかったような新人類史へと展開していく可能性も開けている。

そういう時代に生きていく今の子どもたちには、予想される問題群を難なく突破し、スゴイ未来を開いていける力と夢とスケールをもって個性豊かに伸びていく他はない。子どもたちは実際、地球史や宇宙史に大きな興味と関心をもっているし、地球時代、宇宙時代を生きる人間としてのスケールの広がりをもつようにもなってきた。

そういうなかで、子どもたちが大いに伸びれる発達環境、発達支援の仕組みづくり、総合発達のソフトウェアの開発が重要となってきた。こういった次世代を準備する事業こそ、今の我々の世代にとってはやりがいのあるオモシロイ意味と価値ある仕事であると思う。

夢は広がる。今はまだ小学生を中心とした発達活動展開にしかすぎないが、幼児からお年寄りまでの発達の活動展開が無数に広がる。魅力的な人生展開をしている大人が身近にいるか

らこそ、青少年もまた大きな夢と理想と確信をもって生きていく。そういう兄さんや姉さんが身近なモデルとしているからこそ子どもたちも大いに伸びる。お年寄りのもつ豊かで多様な歴史体験から学ぶチャンスもあり、そのことでまたお年寄りも生きてくる。そうなってもくればそれぞれの世代が大きくも伸びていこう。

多彩な活動づくりをしていく上でも支援者の質と力は大きく問われる。地域に強制力はないからオモシロさで自己展開していくようにするしかない。そうだからこそまた一層オモシロイ。

子ども会の場合がまさにそうである。子どもは正直だ。オモシロければやるし、そうでなければ見向きもしない。新人などはすぐに来なくなってしまう。活動を通じての総合発達をめざせばなおさらのこと支援者の研修トレーニングは不可欠である。この間、最も力を入れたのが支援者の研修でもある。毎週支援者側の支援方針、シナリオづくり。子ども会が終わってからの検討会。企業の業務並みの準備をやってから臨むようにもなってきた。

支援する我々も高度成長期育ちということもあり、必ずしも子ども時代に十分な子ども集団遊びをやれてこれているとはいえない。むしろ、子どもたちと一緒に遊ぶことを通して、自

分自身が子ども時代にやりそこなってきたことを体験し再発達させてきている。だからこそ支援しながらもリフレッシュできるし、自分自身伸びてもいいける。多忙ななか、子どものため、人のためだけでは継続的にやっていくことはムツカシイ。それが自分にもプラスになり、さらに次代の子どもたちにプラスになるからこそ、オモシロイし、やれるのだと思う。

今の子どもたちは非常に多忙になってきている。小学校中学年から塾通いや習い事が始まる。ひどいになると週四〜五回行っている子どももいる。中学生になるとこれに学校のクラブ活動が入ってくる。まさに忙しいサラリーマン並みの生活である。

子どもたちの人生を本当にかげがえないものとして大切にするならば、子どもの生活構造そのものまで含めて、そのあり方を改善していく必要があるのではないだろうか。バランスのとれたゆとりのある生活のあり方、そして子どもが家庭・学校・地域すべての場で伸びていくようにする。三者が連携した子どもたちの発達支援システムづくりが、次の新しい時代を準備するキーとなっているように思える。

△上大岡若手サラリーマンの会▽